

秋の学習会 報告 2008 10月18日(土) 西河原公民館ホールにて

「海外派兵恒久法」がもたらす危険な時代

～ 戦争をしない国であるために～

講師：飯島滋明さん（名古屋学院大学）

飯島先生は、派兵恒久法は現在国会で審議されていないが、油断してはならないと前置きされ、その理由について、憲法9条や、真の国際貢献のあり方などに関連させながら具体的に分かりやすく語っていただきました。

【憲法9条の思想的背景】

憲法9条は、戦争中に国民を守らなかった軍や権力者に対する強烈な不信感と反省を原点に生み出されてきたものだ。しかし現実に憲法9条の意義が活かされてきたかというところではない。

【現実の政治の動き】

現実の政治の中では、憲法の国際協調主義、平和主義に反する政治が進められている。

自衛隊の装備は、国際貢献の名の下に外国にまで行って戦える装備になって来ている。日本は、イラク戦争で米軍の出撃基地としての役割を担い悲惨なファルージャ攻撃の主力部隊は、沖縄の海兵隊である。また、アフリカまでの作戦範囲を持つ米軍の陸軍第1軍

団司令部が座間に移転し、同時に自衛隊の中央即応集団司令部も移転する。まるで植民地であるかのように横須賀は原子力空母の基地になった。

自衛隊も臨検可能な空母を持ち、外国にまで行って攻撃できる空中給油機まで持つようになった。

これまでは、それでも9条による足かせがあり、自衛隊の方から手を出すことはできなかった。この縛りをなくそうとするのが、海外派兵恒久法だ。

写真

【海外派兵恒久法の問題点】

自民党は、2006年8月、いわゆる石破試案という形で「海外派兵を恒久的に自衛隊の本来任務とする国際平和

協力法案」を出した。次のようなことを可能にするこの法案の中身が国際貢献といえるのか？

- 可能になるのは、①安全確保活動（イラクでの米軍のような武力行使）
- ②「警護活動」（「駆けつけ警護」のような形での参戦を可能にする。）
- ③船舶検査活動＝臨検

武力行使をしないまでもクウェートからイラクまで米兵を運ぶことが国際貢献になるのか？

先の大戦での謝罪・補償が不十分のまま信頼醸成を樹立できていない日本が、自衛隊を海外に派兵することで近隣諸国から猜疑の目で見られることは必至である。

また、この法律によって自衛隊員を希望するものが減り、「徴兵制」という事態の可能性もあり、民間人の徴用の可能性もある。

【真の国際貢献とは】

自衛隊でなくてもできる国際貢献はたくさんある。貧困対策、医療、公衆衛生、教育などへの対応のように「人間の安全保障」を実現するための活動こそが「真の国際貢献」。現地で学生たちと活動したカンボジャの現実を見てもこのことが裏づけられる。

~~~~~

飯島先生は、非人道的な戦争への怒り、アメリカと共に戦争ができる国へと変質してきている現状への危機感、国際貢献という美名の下に海外に自衛隊を出して行こうとする政府への憤り

を込めて 80 分間熱く語ってくださいました。私たちは、このお話を受けて今、一人一人が何をすべきなのか考えていきたいと思います。（小俣記）

<アンケートより>

・合唱が素晴らしかったです。ビデオの上映も良かったです。映像や写真から学ぶことも多いです。飯島先生の講演は、とても分かりやすく良かったです。

・今日のビデオを見て涙ぐんでしまいました。私が12歳の時、昭和20年終戦の年で8月15日まで毎日空襲に脅かされて勉強どころではなく、夜10時になるとB29の来襲で掛け布団を防空頭巾の上からかけて逃げたのです。（中略）夜が白み始める頃、午前5時頃帰宅して自分の家族に会えると助かったと安堵したのを覚えています。戦争は破壊と殺戮以外の何ものでもない。昭和20年は日本本土が戦場でした。

・挨拶も歌もよかった。講演は難しい割りに分かりやすかった。写真プリントもとても分かりやすく印象に残った。

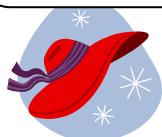
・次のねらいは、派兵恒久法。これで海外派兵が可能になり、憲法改悪につながると考えています。焦点の勉強をさせてもらいました。

・人の存在そのものに根差す問題。しかし、「政治」は、それを社会的に克服するのが仕事。双方から観る複眼が必須。

(東京集会の報告)

## 二つの旅——南京、アウシュビッツ——

寺尾 安子



### 南京への旅

広島の知り合いから誘われて、八月の末「南京を尋ねる旅」に参加した。チャンスだと思う一方、気持ちはずしんと重くなった。広島空港から上海までわずか1時間半。初めての中国はこんなに近いところだったのかと思う。しかし上海市を出ると平野が延々と続き、バスで5時間の南京への道は長かった。車窓からは時折田畑や養殖池で働く人たちの姿が見え、かつて農民や婦女子を襲いながら、この地を進軍した日本軍を想像して緊張した。

翌朝、とても友好的で温かい感じの湯福啓さんという現地の方の案内で「侵華日軍南京大虐殺遇難同胞纪念馆」を訪れた。落ち着いた色調のゲストルームで、総勢30人の日本人客に現地の証言者の1人である82歳の張秀紅さんが体験を語って下さった。通訳は案内役の湯さん。「・・・日本兵は女性を見つけると引っ張り出し、銃剣で刺殺したり、強姦したりした。当時まだ11歳だった私もつかまり輪姦され気を失った。祖父が助けてくれ、開かせられたまま硬直した左右の足を引き寄せ、紐で一つに括ってくれ、看病してくれた。10日ぐらいしてやっと

動けるようになった。住民たちは女の子を稲塚の中に隠したが、日本兵は稲塚にも銃剣を突き刺して回り、中から悲鳴が上がると引き出してなぶり殺しにした。自分も塚の中で手の指を銃剣で切られたが必死に声を抑えて助かった。頭をそって男の子に成りすまし、日本兵の下で掠奪品のアヒルや米を天秤に担いで運ぶ仕事をして占領下を凌いだ。その間何度も日本兵が住民たちを虐殺したり、母親からもぎ取った赤ん坊のお尻に剣を突き通し、血を流しながら泣いて這い回る赤ちゃんを笑いながら眺める光景が目に入った。表現の仕様のないおぞましい姿で、到底人間とは思えなかった。」言いよどみながら話す彼女の体験談は、一度ならず嗚咽で声がつまり、途切れた。聞いている私たちも身も凍り、言葉も失って、ただ彼女の背中をさすり、手を握るこ

写真

としかできなかつた。証言を聞いた後、記念館を見学した。無数の遺骨が折り重なったまま掘り出された坑をそのままガラス越しの展示コーナーにした所、日本兵たちの強姦、掠奪、虐殺の、目を背けたくなる現場の写真の続く館内には、当然現地の若いカップルやグループ、家族連れも見学していた。その中国の人々の中であって私たちは日本語をしゃべること自体はばかられるような気持ちになった。南京市の小高い丘にある孫文の廟、中山陵、歴史ある重厚な城門、緑濃く茂った鈴掛けの並木道を行き交う人々を見るにつけ、遠くない過去この地に日本人が踏み込んで鬼畜にも劣る非道を行うに至ったのはなぜだったのか、歴史と人間についてより深く知るのが恐ろしい気もした。「前事を忘れざるは後事の師なり」と記念館の壁に刻まれていた。



## ポーランド ・アウシュビッツへの旅

南京から帰って1ヶ月しか経っていない9月末、偶然ポーランドを旅することになった。日本より早く来るポーランドの秋を味わってみたかったのだが、当然アウシュビッツにも訪ねなければいけないと……。ナチスが司令部を置いていたため爆撃を免れた古都クラクフは、かつてコペルニクスも学んだというヤギウオ大学や、美しいヴァヴェル城もそのままの中世のたたずまいを残した落ち着いた町だ。しかし

ここからバスで1時間の所にあのアウシュビッツがある。負の世界遺産となり、収容所、ガス室、焼却炉等が整然

写真

と並んでいた。私たちの案内をしてくれたのは中谷剛さんという40歳過ぎの日本人。ここでの試験に合格して採用されているガイドは200人いるが、アジア人は中谷さんただ1人ということだ。私たちの心に問いかけてくるような静かな語り口での案内だった。ヨーロッパ各地から列車に積み込まれてきたユダヤ人、政治犯、ロマ、心身障害者の人々は、働ける者、働けない者に分けられ、後者はすぐガス室へ、次に焼却炉へ送られた。展示室には布地の原料にするためとしてガス室に送られた女性たちの色あせた茶系の毛髪2トンの山。義足、義手の山。ガス室用のチクロBの入っていた缶の山。この収容所で110万以上の人々が犠牲になったと言われる。敷地内でヨーロッパ各地から見学に来ている若者グループに数知れず出会った。みな真剣な眼差しでそれぞれのガイドの話を聞いていた。ドイツからの学生が大変多い

という。粗末な木造の並ぶ第2収容所に吹き渡る風に混じって、ここに閉じ込められた人々の恐怖と絶望の声にならない悲鳴が聞こえてくるような気がした。中谷さんは「このようなことをしたヒトラーはあの民主的なワイマール憲法の下で国民によって選挙で選ばれた人だった・・・ということを考える必要があると思います。」と話を結ばれた。アウシュビッツから離れたアジアからの見学者は多くないが、日本からの訪問者はさらに少なく韓国の6分の1だそうだ。「南京大虐殺などなかった」と言ってはばからない人たちと組んでいる人を為政者として選んで

いる私たち日本の未来は・・・。首都ワルシャワの黄葉の大木に覆われた公園内の宮殿でショパンのピアノ曲の演奏を聴いた。侵略されたポーランドに望郷の念を抱き続けたショパンの激しく美しい調べは、人間の負の歴史を共に悲しみ怒りながら、全ての人が安心して人間らしく暮らせる愛に溢れた未来への夢を紡ぎ出して、私の体に浸透し、心を潤してくれた。

それでも南京やアウシュビッツの地を踏んだこの秋は、心に入った重い石がなかなか軽くない。

## 平和憲法を上手に使っている国、コスタリカ

二階堂まり

この夏、仲間と2人で中米パナマの北にある四国と九州をあわせたくらいの小さな国コスタリカに行ってきた。この国に興味を持ったきっかけはコスタリカの大学生が大統領を「憲法違反だ」として最高裁に訴えたという記事を読んだことだった。NY同時多発テロのあと「対テロ戦争」と称してアメリカが作った「有志同盟」にコスタリカも加わった時だ。これに対し最高裁の「憲法法廷」は大統領に対してすぐに名前をリストからはずすようにアメリカに要請しろという判決を下した。そしてすぐに実現したのだ。「憲法法

廷」は他の法廷と違い下級審から来るのではなく、直訴である。直訴できる条件は①名前②連絡先③問題点の3つが書けること。今までの最年少は8歳だそうだ。また手続きも簡単で、一番ちゃちな例はビール瓶のラベルをはがして裏に書いたというものだ。

教育現場をみたいと思い、小中高校を見学し生徒や教師にインタビューをした。学校ではさまざまな授業を使って平和教育をしているが、始めから「国と国の間の問題」の話をするのではなく「家庭で問題が起きたら？」という身近な問題解決を話し合い、「友だち

と・・・」「グループで・・・」と広げていき国家間の問題につなげていく。先生に何を教えたかかと聞くと揃って「価値観」という言葉が返ってきた。詳しくは他人のことを考える（自他両方の人権）・協力・話し合いでの解決・平和と言われた。問題解決のための法律、国際法も教える。更に、子供のときから政治を自分のものとして考えさせるために「模擬選挙」というのが行われる。国政選挙があると、学校単位で全く同じやり方で「選挙」が行われ、結果が公表される。子供たちはこの‘催し’を異口同音に「楽しい！！」と言っていた。（「政治のことはちょっと・・・」というどこかの国の大人や大学生とは違う・・・）

また人口約440万人の小さな国が難民を100万人以上受け入れている。日本は1981年に難民条約に加入しているが受け入れたのは451人だ！隣のニカラグアからの難民が多く、不法侵入の難民でも教育も医療も無料で受けさせている。コスタリカ人と同じ扱いだ。仕事が無い人もいて格差もできてそれが犯罪につながることもあるが、人も政府も「入れるな」「追い返せ」とは言わない。困っている人は追い出せない、ここに来て少しでも生活がましになるなら断れないと。

コスタリカも日本から2年遅れて1949年に平和憲法をつくり、常備軍を廃止している。そして本当に軍隊も軍事会社もない。更に1983年には周辺

国が社会主義化する中でアメリカが基地を置かせると迫ったのに対してモンヘ大統領が「積極的非武装中立宣言」を行い、改めて進む道を世界に示した。「積極的に」パナマに軍隊を放棄させ、「国連平和大学」の敷地を提供し、環境保護のための「地球評議会」の事務局をおき、京都議定書の原案を作り、「核兵器廃絶条約」を作成して国連総会に公式配布し・・・などなど姿勢が全くぶれず、米国とも対等に付き合っている。

人も空気も食べ物もやわらかく、さらりとして気負わず、それでいて芯は通っている。国が、教育や法律を含めた制度が住む人たちのためにある。そしてそこに住む人たちは自分たちでそれをしっかり受け継いでいこうとしている。そんな印象を受けた。

国土の25%が自然保護区で、生態系の豊かさ（地上の全動植物の種の6%が生息！）に恵まれたエコツーリズムの発祥の地であることも忘れてはならない。





## 本の紹介

発行：大月書店

ハロー、僕は生きてるよ  
——イラク激戦地からログイン——

カーシム・トゥルキ 著  
編訳：高遠菜穂子、細井明美

(岩波ブックレット  
No. 710)

ホロコーストを次世代に伝える  
——アウシュヴィッツ・ミュージアム  
のガイドとして——

中谷 剛 著

イラクの青年カーシムが愛する両親、兄弟、甥、姪たちのことを中心に、米軍ヘリの轟く音、陸上での銃撃音、検問を突破して移動するなど、日常的に死の恐怖にさらされている状況をブログとメールで5年にわたり発信したものを高遠、細井両氏が編集したもの。

徴兵制度の下、何の疑問も抱くことなく大学在学中にイラク軍に入隊し、アメリカの襲撃を受け親友が次々と死に、自分も負傷しながら、それが「戦争というもの」と受け止めていた彼でしたが、高遠さんなど日本人との交流を経るうちに、敵を倒すことを考える兵士から、暴力、武力を拒否し平和を最優先に行動する青年に変わっていくのです。(鈴木真理子 記)

著者の中谷氏は1966年生まれ、学生時代に東欧を旅したことがきっかけでポーランドに移住し、資格を取ってアウシュヴィッツ・ミュージアムのガイドとなった人である。この本で彼は強制収容所からミュージアムへの道のり、ガイドとして向き合ってきたホロコーストの数々の負の遺産、そして各国から訪れてくる見学者のことなどを語っている。この若い日本人の内省的な文章はアウシュヴィッツを私たちの近くに引き寄せ、考えさせるものを待っている。

(狛江市中央図書館にもあります。)

(寺尾 安子 記)

## 予 告

2009年3月14日(土) 午後6時半～8時半

「市民センターのつどい」で お話を聴き、語り合いませんか!

テーマ:「軍隊のない国 コスタリカってどんな国——コスタリカを旅して——」

お話: 二階堂まりさん(演劇ユニット・ピーストレイン)  
川本かず子さん(演劇ユニット・ピーストレイン)

本紙6～7面にありますように、お二人は今年9月に中米のコスタリカを旅され、軍隊のない国コスタリカのその素晴らしさに触れてこられました。

お二人のお話をビデオや写真をまじえてお聴きし、閉塞感漂う日本の進むべき道を語り合ってみませんか。

ささやかなお茶とお菓子も用意します。市民センターのつどいの一環として行いますので、無料です。

早春の夕べ、希望の国の話に耳を傾けてみませんか。是非ご参加下さい。